

希臘神話物語 (二)

荒木千里

四

私はこれから新しき神々の名について物語つてみたいと思ふ。主に星に關係ある神々について語ることは勿論である。

(一) ジュピター

ジュピターは新しき神の父である。新しき神々はジュピターの兄弟姉妹か或はその子孫である。多くの有名な神々は先づジュピターの子に見て差支へない。勿論希臘の神々は一婦を守るにいふ所謂貞操觀念が頗る稀薄であるから、子供の母親はほごんご各々別人だといつていゝ。そしてその母親は必ずしも新しい神に屬してゐなくともいゝのである。

先づ舊神との間に生れた子をあけてみる

ミネルバ(戦術の女神).....

.....母、オツエアーヌスの娘オイチス

ミューズ(文藝の女神).....母、天の娘ムネモジーネ

和合と正義の女神達.....母、天の娘テミス

グラチエン(愛嬌の神).....

.....母、オツエアーヌスの娘オイリモーメ。

アポロ(太陽神).....母ラトナ

ダイアナ(月の女神).....母ラトナ

メルクル.....母アトラスの娘マヤ

なきがそうである。これらの母親達は次第にその姿をかくしてしまつた。さういふのは、ジュピターの妹のユーノが『妾がジュピターの正妻だ』と主張して他の母親達を大いに壓迫したからである。

ジュピターの勢力は實に想像を超越して偉大なものであつた。彼はオリンブ山上の最高坐に坐し、彼が眉毛を動して目くばせすればオリンブは震駭し、彼が微笑すれば天下悉く一時に笑ひ出した程である。彼は力と尊嚴の權化であると同時に、青春の力の充實そのものであつた。驚くべき精力量家であつたのである。彼は女神達で満足するこゝが出来なくて、地上に下つて人間の娘達をもよく荒し廻つた。人間界に手を出したのは彼が初めてであつて彼以前には左様な不都合な真似をする神はなかつたのである。

然しこれ程の威力をもつたジュピターにも儘ならぬ事が一つあつた。それは運命の女神の命令には絶対に反抗し得ないといふことであつた。従つて彼が人間界を荒す時にはこの運命の女神の眼を胡麻化す爲に、色々の姿に身を變へて出沒してゐたのである。

彼は彼の高坐から人間の娘ダネーの家に黄金の雨を降らした。これによつてダネーが懐胎して生んだ子がペルセウスである。ペルセウスは非常な勇士で第二章に述べた怪物を自分の腕で殿り殺した程である。

白鳥の姿に化けてレダの胸に忍び込み高潔の士ポルツクスを生まし又その抱擁によつて世界一の美人ヘレナを生ましたのもジュピターであつた。

力強い牡牛に化けたジュピターは、若い娘のヨーロッパに秋波を送つて誘惑し、その背中にのせたまゝ、海の浪にのつてクレタ島の岸迄つれて行き、ミノスを生ました。ミノスはそこで法律を作り、カミ知恵ミを以つて人民に善政を施した。

ジュピターと人間の娘との間に生れた子は皆勇士であり智者であり美人であつた。

ジュピターがかく人間を荒し初めたのは希臘の神々が人界に興味をもち初めた一つの例であつて、何もジュピター一人に限つたことではない。即ちこの時に至つて希臘神話は人間の歴史とよぼぎ絡みついて來たのである。神々はお互同志の

争ひをやめて、人間の運命に悪戯を初めた。神は人間の勇士達の争鬪を觀るのが楽しみであつた。そして勝つた勇士に褒美として不死をあたへた。

ジュピターは雷神とも呼ばれる。彼は手に雷と電閃をもいづも握つてゐるからである。

ジュピターの威力はホーマーがジュピターに云はしてゐる次の言葉によつて非常に適切にあらはされてゐる。

『金の鎖をこゝ(天)から地に下すから、お前達神々や女神達皆んなでこの鎖を下に引つ張つてみる。ミても俺を地迄この鎖で引き下することは出来まい。俺はナ、この鎖の先きにお前達は愚か、地も海も皆一緒にしぱりつけ、それを片手で樂々天迄引きあげてみせるワイ。』

然しこのジュピターも宜しくその無力を嘆じたことがあつた。ジュピターの息子のサルペドンはトロヤの戦に於て死すべき運命に置かれてゐた。然しジュピターの我子に對する愛情は、彼を運命に抗して尙生命を保たしめんま藻掻いた。然しそれは結局駄目だつた。而もその運命は運命の女神の弱々しい指先によつて、細い運命の糸が殆んま氣紛れの様になつた爲に起つたことなのである。然し今はこゝに運命の女神について詳しく述ぶるべき時ではない。

ユーノは美ミカミの女神である。地を圍んでゐる空氣。それはユーノのもこの姿である。

雨霽れて太陽の光が大氣の中に輝く時、色鮮かに雲間にあらはるゝ虹はユーノの使者、女神のイリスである。イリスが姿をあらはすのは尊きユーノのあらはるゝのを告げる爲である。虹をみえたイリスの姿は實はユーノののつた車を曳く孔雀の尾の反映したものである。

ユーノはジュピターの妻である。天上の皇后なのである。従つて彼女の勢力も亦素破らしいものであつた。

彼等の子は幾人もあつた。その中の一人ルチナは安産の女神であり、ヘーベは青春の女神であつた。ヘーベは永遠の青春を無限の繁殖力を有してゐた。彼女は、人界の勇士ヘルクレスがその德行を勇敢さによつて不死を贏ち得た時、その褒美として、彼の妻に定められた。

又彼等の息子のマルスは手に負へぬ悪戯息子であつた。ジュピターはよくマルスに對して怒つた。そして天上から下界につき落ちてやらうと何度思つたかしれなかつたが、自分の子だと思つても出来なかつた。

ジュピターが女の力を借らずに自分の頭から勝手にミ子ルバを生んだのに對抗して、ユーノも全く男の力を借らず、女一人で子供を造つて生み落した。それがブルカンであつた。ジュピターはユーノ以外に何人も神や人間の娘に子供を生

ましたけれども、その子供達は仲々發育しにくかつた。それは正妻のユーノの嫉妬が邪魔したからである。彼女はその子供達を出来るなら、生れぬ前に殺して仕舞ひたかつた。生れても未だ嬰兒の中に殺したかつた。その爲に彼女は色々の手段を盡したのである。

おこなしいうラトナがジュピターの子アポロミディアナを生むに知つた時、ユーノは龍に命じてラトナを迫害させ、地に命じて彼女にお産の場所を借してはならぬと禁止した。然しデロスの島は海上に浮遊してゐる小島であつて出沒定りなき爲に、地の勢力圏外であつた。ラトナはこの島に安息の地を見出しそこで椰子と橄欖の間に先づディアナを次いでアポロを生んだのである。

又テーベのカドムスの娘セメレがジュピターの子バツクスを生む時、ユーノは産婆の姿に化けてセメレに勧めた『お前さん、あのジュピターの姿は本當のジュピターだと思つてゐるのかい。あれは化けてゐるんだ。折角だから本當の雷神の姿でお前さんを見舞ふ様にお頼みなさいよ』と。セメレの頼みによつてジュピターは雷神の姿であらはれて來た。するに忽ちセメレは眞黒に焦けてしまつた。然しジュピターは幼バツクスを救つて自分の腰に隠した。

又人間の娘アルクメ子がヘルクレスを生むときにも、ユーノは産室の戸の前に頑張つてその出産を呪つてゐた。然しへ

ルクレスは無事に生れた。ユーノは幼いヘルクルスを散々迫害した。そのお蔭でヘルクルスの勇氣は試練されその胸は鋼鐵の如く堅くなり遂に不死性を得て神々の列に伍する素質を養ひ得たのである。

ユーノの嫉妬からは天上の神々でさへ逃れることは出来なかつた。ジュピターの寵愛を受けた妖精カリストは遂に彼女の爲に牝熊にされてしまつた。然しカリストは後日ジュピターによつて星の位に上された。この時ユーノは大洋の海に乞ふてこの新しき神カリストを決してその膝の上に抱いて呉れるなむ懇願した。大熊坐の星々が決して海に没することなく常に天上を徘徊してゐるのはこの爲である。

嘗つてユーノが叛逆を起したことがあつた。ジュピターは怒つてユーノの足に重い足枷をつけて天上に上れぬ様にした。彼女は爲に下界の卑しい人間達の侮辱をも受けて甘まんぜねばならなかつた。すべての天上の神々はこの有様を見て非常に氣の毒がつたといふ。

ユーノは美人ではあつたが天上の女神の最高位に坐してゐるだけに、美しいといふよりは寧ろ氣高い威嚴のある美しさであつて、所謂魅力さいふ點ではペーナスに及ばなかつた。それでもユーノがジュピターの歡心を得る爲に化粧するときは素敵なものであつたといふ。彼女は薄衣の夜服をつけ、金糸の様に光り輝く頭髮を格恰よくちぢらし、そして素破ら

しい香油をつけた。その香りは髪の毛の一條でもゆれる毎に天上から下界迄匂ひわたつて人界の人々を恍惚たらしめたといふ。その上から彼女はミネルバが織つてくれた神衣をまじひ、胸には黄金の留針をつけた。そして帶をしめ靴を履いたこの帶や靴の輝きはまきまして下界迄も達することがあつたといふ。

(二) アポロ

アポロは永久に若々しい太陽の光をあらはした神である。破壊的の威力も若々しい美の調和した神なのである。この若さ美の神は歌舞音楽が好きであつた云へば誠に優雅に聞へるけれども同時に彼は肩に箠を負ふて銀の弓を携へて意の趣くまゝ勝手に矢を射放したものである。この矢は疫病をもたらして人間を苦しめ又その矢に射られた人間は立ち處に死ななくてはならなかつた。これは彼の若さが到した悪戯なのである。

アポロはデアナの弟である。兩人共矢をもつて人を射殺する點に於て死の神である。アポロの矢は男を射た。そしてデアナの矢は女を射た。彼等は青春の神なるが故に老人を惡んだ。如何なる人間も年老いて力も美も失ふ頃になる。彼等の矢を受けなくてはならなかつた。彼等あるが故に生れるものも死する者もが略平行して世の中にあまり醜い皺くち

やの老人が居なくて済むのである。彼等は恐しい神ではあるけれども世の中を美しく若々しく保つて行くといふ點からいふと感謝すべき神なのである。さればこそ希臘人は彼等に滿腔の尊敬と禮拜を捧げてゐる。

これに似た話を私はも一つ思出すことが出来る。ジュピターから送られた鳩の群が危険多シチリアの上空を飛び行く時屹度その群の中の一羽がその列から行方不明になつた。然しジュピターはすぐその一羽を補充して全體の鳩の数を一定にしてゐた。こんなことは希臘の神々が好んでやつたことなのである。

アポロの矢を受けるのは老人以外の若いものでも、アポロの機嫌を損じた人間は矢張り射られねばならなかつた。嘗つて希臘人の軍隊にペストが流行して多數の兵士が頻々として斃れたことがあつた。これは希臘の軍隊がアポロの氣を悪くする様なことをした爲に、彼は夜の如くひそかにその陣營に忍び寄つて彼の弓をしほつて死の矢を射てる爲であつた。

アポロは然し必ずしも常に怒るのではなかつた。彼の矢は人を傷る代りに彼は射られた者の傷を癒すことも知つてゐた。彼の子の**エスクラツプ**はすべての痛みをすべての病氣に對する藥を知つてゐて、彼の技術によつて病者は死より救はれることが出来た。

希臘の神は恐しい一面と共に優しい一面をも持つてゐた。

アポロはこの方面に於て音楽のすきな神だつた。

希臘の詩人は惱める友を慰めて次の様に云つてゐる。

『お前が今そんなに悲しみに陥つてゐても、決していつもそう悲しいことばかりあるのじやない。アポロも弓を引いてばかりは居まい。時には琴をひいて音楽を楽しむこともあるからナ。』

オーロラの息子**メムノ**の金の記念塔がアポロの光を受けて朗らかに鳴り響いたといふのもアポロの音楽好きと關係のある事實ではあるまいか。

アポロは又牧者として姿を現すことがあつた。昔の傳へによれば牧場の家畜は一人の牧者なくとも、すべてを照す太陽の光に護られて安らかに育つて行つたといふ。これはアポロが牧者になつて畜群を世話した爲である。

希臘神話に於ては神の發育が非常に早い。このアポロなどもその適例である。

既に述べた様にアポロはデロスの島に生れた。彼が生れる時には**デミス**、**レア**、**デイオチ**、**アムフィットリテ**などの氣高き女神達が列坐してゐた。彼女達は彼を柔い襁褓に包んでやつた。そして**デミス**は彼に七絃琴と神の食物をあたへた。何んになれば彼は母の乳を決して飲まなかつたから。

かくてアポロが一度神の食を口にすると、彼の身體は遽に肥大して彼の身につけた帯は最早合はなくなつてしまつた。

彼は立ち上つて自由に歩き廻り且つ自由に喋つた。

『金の琴は俺の樂みだ。銀の弓は俺の慰みだ。そして俺は眞暗な未來を豫言してやるんだ』

彼は斯く云つて方に滿ちた足取りで、堂々山を越え、島を越えて歩み去つた。彼は岩山ピトリーからオリンブに上つた。

オリンブの山上には神々の集會が開かれてゐた。彼の出現によつて遽に歌舞音樂が始められ、グラチエンは舞ひミュージ達は、聖き神々の歡びみ、老き死きを逃れ得ぬ人間の嘆きみを節面白く歌つた。かくて神々はアポロの出生を祝福してやつたのである。

アポロはオリンブを下つてデルフ井に來り、そこで恐ろしい龍を退治した。

このデルフ井には高き岩山の上にアポロの神殿が立つてゐる。

そしてその岩穴の入口には三脚がおいてあつて、その上に、アポロの別名に因んだ神巫ピチアが坐つて居て、この女の口を借つてアポロは未來の豫言を告げてゐるたこいふ。

(四) ネブチユーン

ネブチユーンはジュピターの兄弟である。ジュピターがサタンの天下を奪つた時その領土を三分して海を支配した神である。

ネブチユーンは何にあれ速に動くものが氣に入つた。彼は駿馬を御して彼の車を陸地に乗つつける。これが岸を嘯む怒濤なのである。ぐずぐずするここの嫌な彼には海上を走る快速の船の如きは頗る御氣に召してゐる。

彼は頭髮の一本一本が蛇だつたこいふ女神のメヅユサミ結婚して、翅をもつたヘガスを生んだ。このヘガスは勇士ペルセウスがメジユサの首を刎ねた時その血の滴から生れ出た男である。ネブチユーンの妹のツエレスは農業の女神であるが、彼女は兄の抱擁を恐れて自ら牝馬になつた。然し彼も亦牡馬に化して彼女を追ひかけ、遂に彼女との間に風の如く足の速い駿馬アリオンを生んだ。この馬は競争に出た時騎手を振り落してしまつて勝手に走り廻り、自分丈けで賞品を貰つた程手に負へぬ荒馬であつた。

ネブチユーンはジュピターと同じくサタンから生れた子であつたが、その勢力はジュピターには及ばなかつた。他の群神に比すれば勿論遙に偉大な神ではあつたが、ある時彼の子のポリフェムの眼玉を智者のウリセスが奪ひ取つたこいふがあつた。其時以來ネブチユーンはウリセスを憎むこいふ一方ならず折あらば息子の讐を取らむこいふやつてゐた。果して後日彼はウリセスを舟もろこも岩に變じてしまつた。

彼は頗る無風流な男であつた。ある時ミュージ達はヘリコン山で音樂會を開いて周圍の森も林も躁き廻り、ヘリコンの

山が跳り出した程大騒ぎをやつた時、ネプチューンは躁しい阿女ツチヨ奴、身の程を知らぬにも程があるを怒り出した。そしてベガススを使ひやつてピタリとその騒ぎをやめさせてしまつた。

海の波が少しの風でも怒り易い様にネプチューンはよく怒る神だつたのである。

トロアの戦争の時にもジュピターがトロア軍の肩をもつたのが氣に食はぬまで彼は水軍をひきゐるて押し寄せ散々地上を暴れ廻つたことがある。

彼は希臘の神々の中では仲々の荒神だつたのである。

(五) ミネルバ(パラス、アテナ)

既に述べた如くミネルバは母親の腹を痛めて生れなかつた爲に容貌はまことに花の如く美しかつたけれども心は氷の如く冷く全く女らしい優しさはもつてゐなかつた。そして恐るべき破壊性ミカミを多量に有つてゐた。彼女は軍神マルスの如く、血腥き戦場ミ、荒寥たる戦跡ミを見るのが好きであつた。たゞ異なるところは彼女は同時に平和なる美術をも愛してゐたといふことである。むしろ新しき美術を建設せんが爲に破壊を好んだといふことも出来る。

力を誇るアヒレスも彼女の前には無力であつた。彼がアガメムノンに對して劍を抜かんざした時、ミネルバは彼の髪を

擽んで止めよといつた。流石のアヒレスもこの言葉には敵くことは出来なかつた。彼女の力はかくも神々の間に恐れられてゐたのである。

嘗つて海神ネプチューンが彼の駿馬を驅つて街々を破壊し地上を荒した時、ミネルバはそのあごに平和な橄欖樹を植えた。そこに生れ出でた街は文華燦然と開いた藝術の街であつた。彼女は己の別名パラス、アテナに因んでその街にアテナといふ名を付した。これ世界史上、その文化を謳はれた希臘の街なのである。

トロアの戦にあたり、遂に神々も各希臘方ミトロア方に分れて相争ふに至つた時、亂暴者のマルスは彼の槍をひつさけて、ミネルバの楯に及向ふた。彼女は靜に二三歩退いて地にあつた巨岩をマルスに投げつけ彼の眉けんを割つた。マルスは其場に打倒れてしまつた。

希臘人の幻想に於ては矢張りミネルバも女らしい弱點をもつてゐた。彼女が初めてこの世に笛を作り出した時、彼女はその笛を携へて小川の邊に來た。小川は澄み切つた清らかな水をたゞへてゐたけれども、浮んでゐた泡が、水にうつつ、たミネルバの顔を歪めて醜い姿に見せた。彼女は怒つてその笛を水中に投げ捨てた。笛は心なく流れて行つた。そして獸人マルシアスの手に拾はれた。それが彼の身の禍にならうとは彼もその時には知らなかつたのである。

又彼女は、ビーナスが美貌の賞としてトロア王バリから黄金の林檎を貰つたのを嫉しく思つてゐた。トロア戦争が遂にトロア方の敗北に歸しトロアの街が火中に陥つた時彼女は復讐の遂げられた會心の笑を洩した。彼女はやはり他人の美を嫉妬する女の心をもつてゐるのである。

(六) マ ル ス

戰の神のマルスは神界に鳴り響いた亂暴者であつた。彼は戰の神であつて、正義の神ではなかつた爲に、正義に味方して戰ふまいふ様な立派な行はしなかつた。彼はたゞ戰そのものが好であつた。トロアの戰爭のときでもごちらが勝たうご負けやうごそれは彼には無關係であつた。だから彼は氣の向き次第ごちらの味方にでもなつた。彼はたゞ切つたり切られたりする血醒い戦場で暴れ廻ることが楽しみだつたのである。トロアの戰で勇士ディオメデスの爲に傷けられた時彼の呻く聲は百萬の人間の呻聲の如く戰場に響き渡つたごいふ。

彼は傷ける身を曳きつづつてジュピターの許に來り彼の恨みを訴へた。ジュピターは然し少しも同情してくれなかつた。『馬鹿野郎！俺はオリンプに住んでゐる神々の中でお前が一番嫌なのだ、戰爭ご喧嘩ばかり道樂にしてやがつて、何一つ取柄はありやしない。もしお前が俺の子でなかつたら、お前を神の中に加へてはおきやしないんだ』

マルスはかく亂暴者であつたけれども、又見掛けによらぬ色男であつた。彼は神界一の美人ビーナスの心を惹くことに成功した。ビーナスは既にブルカーン(火山神)の妻であつた彼等はブルカーンの目を忍んで不義の戀を樂しんだ。かくて粗野な亂暴者のマルスご優雅な美の女神との間に生れた不義の子、それがハルモニア(調和)ごいふ美しい娘なのである。ブルカーンは怒つた。然しそれは無駄であつた。美は希臘人の考へによれば絶對的であつた。美はすべての怒、憎を超越する。ブルカーンの怒りもビーナスの一笑によつて解けてしまつた。

極端な性格を有つてゐたマルスには色々の補助者が必要であつたのである。ビーナスはその美によつて彼の性格を和けんごした。ミネルバはその智を以つて或は彼を懲し或は彼に注告して彼の性格を善導せむごした。然し結局亂暴者のマルスは亂暴者ごして終始してゐる。

(七) ビーナス

ビーナスは繁殖慾ご、子孫へ流る、生命の充實ご、結婚への誘惑ごしての美貌を象徴した頗る魅惑的な女神である。彼女は若さご美しさご以つて、勝ち誇つた女王の如く神々の間を闊歩してゐた。

古來傾城ごいふ言葉がある。けに女の美は屢々世を戰亂の

中に誘ふ原因もなつた。ビーナスも亦この例に洩れない。彼女はトロアのバリに世の中で一番美しい女をその妻として贈らうと約束した。そして當時美貌人界に鳴り響いてゐた、希臘の王子妃ヘレナを奪ふこゝを勧めた。そしてそれは彼女の約束通りに行はれた。

ビーナスはヘレナをバリの部屋に誘ふた。ヘレナが自分の犯さんとする罪を恐れて拒んだ時ビーナスは脅した。

『可愛そうに！もし私の云ふこゝを聞かなければ、私は今迄随分お前を愛してゐたけれども、これからお前を反對にひどく憎みますよ』かくて弱き女ヘレナはバリの手に奪はれた。

ミ子ラウスは怒つた。そしてこゝに有名なトロアの戦争が初つた。

もしもビーナスにミネルバ程の冷静さ、テミス程の眞摯さがあつたら、決してこんな無益の恐しい悪戯はしなかつたであらうが、ビーナスは自分の偏愛するバリ一人の爲には萬人の苦痛なきは初めから考へなかつたのである。それは戀の神のやり方として決して不思議ではないかも知れない。

このトロアの戦争は初めはトロヤ人ミ希臘人との戦争だつたけれども、終には神々も各兩者に分れて相争ふに至つた。希臘方のミネルバは戦場でビーナスを執へて、彼女が昏倒して腰が立たなくなつた程その胸を殴りつけた。そして勝ち誇つたミネルバは『トロヤの味方をする奴等は、皆んなこの女

の様に腰抜けばかりだよ』と嘲笑つた。

神々の中でも男の神達はビーナスの美貌に免じて、彼女のやる大概のこゝは大目に見てゐたけれども、女の神達は彼女の美貌をあまり快く思はなかつたらしく、何かにつけて虐めたものである。

ビーナスの車を曳くものは鳩であつた。彼女のお伴について歩いたものは戀の神のキューピッドであつた。キューピッドは弓と矢を持つた子供である。彼の矢は戀の傷手であつた花園に甘き戀を囁く若き戀人達も、一度その矢を受くる時、彼等の戀は悲しき破滅に終らねばならなかつたのである。

(八) デイアナ

女神達の中でビーナスの勝てない女神が三人あつた。それは前述のミネルバミ、ジュピターの首にかけて決して結婚しないミ誓つたベスタミこゝに述べんミするデイアナミである。デイアナは狩の好きな女神であつた。彼女は金の弓をもつて好んで森蔭を逍遙し鹿を射てよろこんだ。彼女が矢を放つ時森は震ひ渡つたといふ。

然し彼女は狩場に於ても決して兄弟アポロの事を忘れなかつた。充分に狩に満足すれば、彼女は弓を收めて、アポロの住家デイフキに歸つて行つた。そこで彼女はミユース達や、グラツイエンにコーラスを歌はした。その歌は彼等二人を生

んでくれた母親ラトナの讃歌であつた。

デИАアナはアポロの姉として月の女神であつた。アポロに次いで天空に最も輝くものは彼女デИАアナである。彼女が輝くのは彼女自身が輝くのではない。仲のいゝ彼女の弟が照ししてくれるその光を受けて輝くのである。考へ方によれば彼女はアポロと同體だといつていゝのである。

彼女はアポロと同じく青春を愛し老衰を惡むが故に容赦なく老人には死の矢を送つた。老婆の死は、月の女神デИАアナの矢の爲だと思ふに夜毎を照す月の光も轉々凄愴の氣を帯びてくる。

デИАアナにも女らしい心はあつた。彼女の浴みしてゐる姿を隙間見た獵人のアクテオンは彼女の女らしい羞恥心の犠牲となつて立所に鹿の姿に化せられてしまつた。そして彼自身の獵犬に追ひ廻されて咬み殺されて仕舞つた。

又彼女に仕えてゐる尼僧の一人がその愛人を僧堂に引き入れてデИАアナの神聖をけがしたことがあつた。忽ち女神の怒にふれその地方全部に罰としてベスタの流行が起つた。遂に里人等是不義の二人を女神への犠牲に供へて漸く許を乞ふことが出来た。

デИАアナは潔白といふことを最も重んじた女神だつたのである。

森の女王たる彼女も思ひあがつて、トロアの戰の時天上の

女王ユーノに喧嘩を吹きかけたことがあつた。忽ち『身の程も知らぬ馬鹿者奴』と叱られて、手を押へられたまゝ、彼女自身を負ふてゐる籐を奪はれ双の頬が歪む程殴りつけられた。驚に睨まれた鳩の如くあわれにもデИАアナは泣きながら籐を拾つてその場を逃れた。

彼女に比すれば弟のアポロは遙に賢明であつた。同じくトロアの戰で伯父ネプチューンに試合を申込みられた時『さうして愚かな人間共の争故に、私共神たるものが傷け合ふことが出来ませうか、彼等人間共はまことに木々に繁つてゐる木の葉の如く全く果敢ないもので御座いますヨ』といつて拒絶したのである。

矢張り女だけにアポロには及ばなかつたのであらう。

(九) ツエレス

ジュピターの三人の姉妹の中ユーノだけはジュピターの正妻となつて勢力を振つたがあとの二人ツエレスとベスタとは至極おとなしい女神達であつた。ツエレスは農業の神でありベスタは人間に火を用ふることを教へた神である。

ツエレスも矢張りジュピターとの間にプロセルピナといふ娘の子を成した。然しこの子は長く日の光に浴することが出来なかつた。彼女が友達と一緒に無心に牧場の花を摘んでゐた時恐怖の王ハーデスはいきなり彼女を抱きあけて、藻がく

彼女を青馬をつないだ馬車に乗せたまゝ、連れ去つたのである。牧場の妖精達は怒り悲んでその馬車を止め様とした。然し地の神ブルトーは二又の黒檀の杖で地をたたいて地殻を開き、地下の宮殿にその馬車を走らせ去つた。

ツエレスは愛兒の奪はれたこゝを知つて嘆き悲んだ。然し誰れが一體連れ去つたのかそれは彼女も知らなかつた。やむなく彼女は己の炬火からエトナの山に火をつけて道明りしし夜に目を次いで地の果々迄も龍車を驅つて探し廻つた。然しそれは遂に悲しい無益に終つた。遂に彼女は疲れ切つて、アツチカなるエレウジスといふ地に來た。彼女はもう悲しみて胸一抔であつた。茫然として岩の上に坐り込んで仕舞つた。その里にツエレウスといふ男があつた。彼は倒れてゐる女神を見出して己れの家を招じた。然し彼の家にも悲しみが充ちてゐた。彼の愛兒が明日知れぬ生命を抱きつゝ、死の床に横つてゐたのである。彼女は彼の悲しみに心から同情するこゝが出来た。彼女はすぐにその子の病を直してやつた。又彼女はツエレウスの長子に飛龍をつないだ車に奪ひ小麥をあたへた。彼はその車を驅つて世界中その小麥の種を祝福を播いてゐた。人の世に小麥をつくる農業がおこつたのはその時からである。

遂に、すべてを見透す太陽はツエレスの嘆きを不憫と思つて、愛兒の在り家を教へてやつた。勿論彼女は愛兒を地獄か

らごり戻さうとした。ジュピターも、もし彼の子がまだブルトーの國の食物を食つてゐなければ連れ戻してもよからうと同意してくれた。然し何んといふ情ないこゝであらう。プロセルピナは誘惑に打負けて柘榴の實を既に食つてゐた。従つて彼女は地獄から歸れなかつた。然しツエレスは一年のある時期だけ愛兒を喜す爲にブルトーの國地獄に滞在するこゝが出来た。そして一年の残りの部分を地上に暮した。穀物が枯れて地下に眠つてゐる時期、それがツエレスが地下の國を訪れて居る時期であり、穀物が芽をふいて地上に實る迄の時期、これがツエレスが地上に歸つて來てゐる間の時期なのである。かくてツエレスは永久に地上と地下とを往來してゐるのである。

人間の事なごまるで意中にない希臘の神々の中でもツエレスだけはまことに優しい人間の苦難を理解した女神であつた。然し希臘の神の通性としてこのツエレスも神に對して非禮をなしたものに向つては矢張り恐しい刑罰を以つて報いた。ツエレスの聖林を伐り拂つた男があつた。勿論、伐る前にツエレスは伐つてはいけなうと注意したのだが亂暴な男は平氣で伐つてしまつた。彼は永久に止むこゝなき飢饉を以つて罰された。

(十) ブルカーヌス

ブルカーヌスは火の神である。煙ミ蒸氣に包まれた仕事場で灼熱した鐵を鍛へてゐる神の姿、それがブルカーヌスである。後人は煙を吐く火山をブルカーヌスの仕事場ミ想像して火山を呼ぶに英語では *Vulcano* 獨逸語では *Vulkan* といつてゐる。ブルカーヌスも亦藝術の神ミせられた。鐵で造つた種々の藝は彼の司るころのものである。ブルカーヌスは既に述べた如くジュピターが獨りでミネルバを生んだのに對抗してユーノがジュピターの力を借りず自分勝手に生んだ子なのである。

彼は神々の中で最も醜い容貌を有つた男であり且跛者であつた。ジュピターは彼の醜さを嫌つて天上から下界につき落した。彼は神々の光榮あるコーラスにも加はることを許されなかつた。醜い男は煤煙ミ蒸氣ミ焰の中で働いて居ればよいミ神々に思はれてゐたのであらう。

神々はよく彼を笑ひものにした。彼は神々の宴會の席で給人人共を監督しながら、自ら跛足を曳きづりながら神々の間を酒をついで廻つた。神々は彼の不格恰な様子を見て丁度客が幫間を笑ふ如く笑つたものである。

彼は槌を振つて色々のものをつくつた。又彼は自ら造つたものに容易に生命を吹き込んだ。或時彼は黄金の車輪のついた三脚を十二個造つた。それらの三脚は神々の宴席に於て彼の目配によつてあちこちに自由に動き廻つたといふ。

又黄金の下婢を造つて自由に臺所の用を務めさせたといふ話もある。

醜きブルカーヌスは美しきベーンヌスミ結婚した。然し彼は浮氣者のベーンヌスに對していつも嫉妬心を燃してゐた。彼女がマルスミ不義の戀に陥るや、彼は自ら金網を造つて二人の不義者をかぶせてしまつた。そしてすべての神々をそこに呼んで彼は悲しみを訴へた。この話は長く神々や人間の間に笑話として語られた。

藝術の神は數多い希臘の神々の中にもそう餘けいにはない。このブルカーヌスミ前述のミネルバ、それに人間をつくつた**プロメトイス**の三人である。この三人の神はお互に非常に仲がよかつた。

プロメトイスが人間を造るごきにも他の二人は手傳つてやつた。然し皮肉なジュピターは後日プロメトイスが天上から光をぬすんだ時、彼を岩に縛りつけて懲さんごし、その役をブルカーヌスに命令したジュピターの命には絶對に叛き得ないブルカーヌスは涙を振つてその友を縛つたのである。

醜いブルカーヌスは人の情を知る機會が少かつたといへて藝術の友ミネルバの親切が身に沁みて嬉しかつたのであらう。彼はミネルバに結婚を申込んだ。それは遂に受け入れられなかつたけれども、彼の一念に動かされてか、ミネルバの代りに地が彼の子を孕み、生み落したのが**エリミトニウス**といふ

蛇の足をもつた男の子であつた。ミネルバは哀れご思ひ、その子をひき取つて、彼女の愛する街アテネの王にしてやつた彼は己の足の不具なるを恥ぢ、人に見られぬ爲に、四輪の幌馬車を發明して、乗つてあるいた。今日の馬車の起源はこの時である。

トロヤの戦の時ブルカーヌスは母親の命によつて河の神スカマンダーに試合したこゝがあつた。河神はその澎湃たる水勢を以つて立ち向ひ、ブルカーヌスは滔々たる烈火を以つてこれに應じた。この試合に於ては火の勢つよくして附近の森は焼け、水は蒸發し、魚は死して遂に河の神はブルカーヌスに降参した。

ブルカーヌスも相當に威力を發揮してゐたものと見へる。

(續)

(註) 希臘人が希臘神の生れると言ふ事に對する考へは非常に複雑であつて作ると言ふ事(Erzengung)を生むと言ふ事(Gebhen)とは別物の如く考へてゐる。例へばミネルバ女神はジユピターと母親メチスとの二人で作つたのであるが生まれたのはジユピターの頭からである。

月火口アリスチレス Aristiles の二重運河に就て

中村 要

月面の有名な山脈であるアペナイン及びアルプス山脈に圍まれた平原に行儀よく列んだアルキメデス、オートリクス、アリスチレスの三火口がある其の最小のものがアリスチレスで其の西北に火口壁を横ぎつて小望遠鏡で線が見える。

精細なる火星表面の研究に非常に靜かな空氣の状態で重要である事はよく知られて居るが運河に關して大口徑及び小口徑の實效力についてしばしば論争された。運河が大口徑よりも小口徑で見える事に關し此のアリスチレスの運河は優に小口徑の運河の有力なる事を示す。(月の運河は月面にある直線狀の模様名稱)

圖に示せる如く火口壁を横ぎつて居るが頂點より外部の二本はリツク天文臺の二重星専門家エイケン氏が三十六吋にて注意したものであるが此の報知がジャマイカのピケリングの許にミッキラーク十一吋で觀測の結果外部の二本を容易に認めたるのみならず内壁のものも二本なる事を發見したので